

家族の絆をつなぐ写真家・浅田政志

10月2日(金)に全国東宝系で公開される映画「浅田家!」。津市は撮影が行われただけでなく、劇中でも実名で登場します。今回の市長対談では、映画の原案となった写真集「浅田家」と「アルバムのチカラ」の著者である津市出身の写真家・浅田政志さんに、作品に込める思いや今後の展望についてお話を伺いました。

市長 写真集「浅田家」の表紙を飾る消防士と消防車の写真は、本日の対談場所である津市中消防署で撮影されました。消防士に扮するのは浅田政志さんのお父さんとお母さん、お兄さん、そしてご自身です。なぜ家族を作品のモデルにしようと思われたのですか。

浅田 写真の専門学校に通っていたとき、「1枚の写真で自分を表現しなさい」という課題が出たんです。答えが出ない中、もし一生であと1枚しか写真が撮れないとしたら…とか、死ぬ間際に神様に「たくさんある写真の中から1枚だけ見ていいよ」って言われたら自分はどの写真を選ぶのかなと考えたとき、「家族写真だな」と思ったんです。それま

では家族写真はちょっと恥ずかしいものだと遠ざけていて、見たことがない写真や、かっこいい写真を撮りたいと思っていました。でも初めて撮った家族写真は想像以上に手ごたえがあって、すごく良いものだと思います。これまでの景色が180度変わるような経験でした。そこから20年以上続くとは僕も家族も思っていなかったですけどね。(笑)

市長 「一生に一枚」の家族写真は、どんなシーンだったのでしょうか。

浅田 小学生の時に自宅で父がけがをして、外出していた看護師の母を全速力で呼びに行った僕も自転車でこけて顎から血が吹き出たんです。病院に行こうとした矢先、兄も階段から落ちて頭を打って、結局男3人が母が勤務していた病院で治療されたという恥ずかしい思い出があって…。

その家族の一番の思い出話を再現して撮りました。

市長 病院で3人が包帯を巻いている写真ですね。1枚の写真が家族の特別な思い出を語り出す感じですね。

浅田 僕の写真のジャンルは、セットアップ写真や演出写真といわれています。場所や衣装、仕草、光など全てにおいて演出を加えて、映画的な作り方って言われることもあります。ちょっと集合写真に似ていますよね。

市長 フィルムカメラで撮影されるのですか？

浅田 仕事ではその場で確認できるデジタルも使いますが、ここぞと言うときはフィルムカメラを使うというイメージです。自分の家族を撮る時だけは今でもフィルムです。1枚カシャっときることが体に染み付いていて、そのリズムの方が良い写真



浅田家「消防士」2006年

1枚の写真で
自分を表現する
—
その答えが
「家族写真」でした

写真家

浅田 政志さん

ASADA MASASHI

1979年津市生まれ。橋南中学校、津工業高校、日本写真映像専門学校研究科卒業。2009年に写真集「浅田家」で第34回木村伊兵衛写真賞受賞。最新作「浅田撮影局 まんねん」など話題作多数。現在、PARCO MUSEUM TOKYO(渋谷パルコ)にて写真展『浅田撮影局』を開催中。

